

「苺ばかりズルイ。あたしもする！」

妹の行為を呆然と見つめていた杏子が、また悲鳴に近い声をあげた。

「いいよ。それじゃあ、杏子も一緒にしよう」

苺が身体を脇にずらすと、姉がためらいがちに少年の股間へと顔を近づけてきた。

「じゃあ、杏子はそっち側ね。あたしは、こっちから舐めるから」

「う、うん。わかった」

少女の提案にうなずいた杏子だったが、どこか逃げ腰な態度は否めない。妹への嫉妬と勢いで、思わず「あたしもする」などと口走ったものの、やはり勃起した男性器に口をつけることに抵抗があるのだろう。

それでも、杏子はどうやく舌を突きだしてペニスに近づけた。姉の動きを見ながら、苺もゆつくりと舌を肉棒に接近させる。

一物に舌をまったく同時に這わせると、二人は同じタイミングで両脇からゆつくりと舐めあげた。

「うわあっ！ そ、それ……気持ちよすぎるよ！」

悠斗が悲鳴に近い声をあげながら、顔をしかめて体を強<sup>こわ</sup>ばらせる。

「本当に？ 聞いた、杏子？ お兄ちゃん、気持ちいいんだって」



「んっ。嬉しい。お兄ちゃんが悦んでくれて、なんだかすごく嬉しいの」  
トロンとして目で、つぶやくように言う杏子。

苺も、姉とまったく同じ気持ちだった。悠斗が快感を得ているのを見ると、胸の奥が熱くなつて、「もっと悦んでほしい」という思いが湧きあがってくる。

二人は一本のアイスを舐め合うように、再び両脇から大きな勃起を舐めつづけた。

最初はおっかなびっくりという感じできちなかつた杏子も、いつしか舐める行為に没頭していた。それに、さすがは双子と言うべきだろうか、苺が「もう少し上を舐めよう」と考えると、なにも言わなくても姉も舌の位置をズラしてくれる。

そうして、ついに舌が先端付近の一番太い部分に到達した。

（ああ、ここをナメナメしたい。この太い部分と先っぽ、いっぱい舐めたいよお）  
なぜかそんな思いがこみあげてきて、苺は姉とともに亀頭冠を舐めまわした。

「くあああつ！　そ、そこをそんなに……我慢ができ……ううううっ！」

悠斗が、今までにも増して苦しそうな声をもらす。

（お兄ちゃん、今すぐく感じてくれてる）

そんな悦びを胸に、少女と杏子がさらにカ리를舐めていると、

「ダメだ、もう出る！」

少年が切羽つまった声をあげるのと同時に、ペニスがビクンと大きく震えた。つづいて、先端の鈴口から糊のりに似た白い液が打ち上げ花火のように勢いよく飛び出す。

「ひゃんっ！」

「えっ？」

突然のことに驚きの声をあげ、口を離す苺と杏子。その二人の顔に、宙を舞った大量の白濁液がボトボトと降り注いだ。

放出が収まったあとも、杏子はなにが起きたかわかっていないのか、床にペタンと座りこんだまま呆然としていた。また、精を出した少年も、惚ほろけてしまったかのように虚ろな目で中空を見て動こうとしない。

「ああ、ビックリしたあ。今のが射精だよな？ あんなに勢いがあるんだね」  
ツインテールの少女の言葉で、ようやく悠斗の目に光が戻った。

「あつ、えつと……ゴメン、顔にかけちゃって」

「ふええ。顔がベトベトするう」

我われにかえった杏子も、世にも情けない声をあげながら、顔を拭こうとする。

だが、苺は精液を拭おうとした姉の手を押さえた。

「待って、杏子。お兄ちゃんのセーエキだよ。拭っちゃうなんて、もったいないよ」

そう言つて、少女は姉に顔を近づけると、こびりついている白いエキスをペロツと舐め取つた。舌に、若干の生臭さじやつかんと苦みなどが入り交じつた味と、ベタつくようなとろみがひろがる。

（うわつ、変な味……でも、なんだかイヤじゃない。やっぱり、お兄ちゃんのセーエキだからかな？）

などと思ひながらも、苺はポニーテールの少女の顔についていたスペルマを、すべて綺麗に舐め終えてしまった。

そうして、少女が自分の顔の白い粘液を拭おうとすると、今度は杏子がその手を押しとどめた。

「苺、あたしもしてあげるね」

と言うと、姉が顔を近づけてきて精液を舌で拭いはじめる。

（んっ。杏子の舌、ちよっとくすぐったい。でも、なんだかい気持ち）

ツインテールの少女は、顔を這う姉の舌の感触を楽しみながら、股間のうずきが大きくなるのを抑えられなかった。口内に残る白濁液の匂いや感触のせいなのか、顔を舐められる刺激だけでも快感が全身を駆けめぐる。

杏子が精液をあらかた舐め取る頃には、苺はもう自分のなかに生じた欲望を我慢で

きなくなっていた。

（お兄ちゃんのおチン×ン、まだ元気いっぱい……きつと、あたしたちがセーエキを舐め合ってるのを見て、お兄ちゃんもコーフンしてるんだ）

そう考えるだけで股間のムズムズ感が増して、少女の身体の内側から性の果汁が湧きだしてくる。

「杏子ちゃん、苺ちゃん。俺、我慢できないよ」

と言つて、射精したばかりの少年が、血走った目で双子を見た。

彼がなにを望んでいるのか、未経験者の苺にも理解できる。

（あたしたち、いよいよお兄ちゃんと……でも、お兄ちゃんはあたしと杏子と、どっちを先にするのか？ お願い、あたしを……苺を選んで）

そんなことを思っていると、少年が口を開くより早く、

「お兄ちゃん、苺にしてあげて」

と、杏子があっさり先鋒を譲った。

苺が驚いて姉を見ると、ポニーテールの少女はうつ向きながら言葉をつづけた。

「あたし、いつも苺に迷惑をかけっぱなしだったし……それに、あたしはまだエッチが怖いから」